

六、『愚者共の挽歌』

0

——九月。

大都会新宿では初秋を感じさせるものなど、精々、街頭の大きなスクリーンから流れるCMか、デパートなどの秋物の商品ぐらいなものだ。

そんな喧噪から一つずれたところをカタナは一人歩いていた。

雑居ビルの据えた臭いが鼻につくが、気にはならない。

じやらじやらと、鎖の音を鳴らしながら、路地を歩く。

今日は実に気分が良い。

僅かに冷たい風が、気分を良くしてくれるのだろう。

何か良いことでもありそうだ。

なあーん

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

眼前の屏の上に、猫が一匹。

真っ白な、一つも他に模様のない手の平サイズの仔猫だ。

それが、こちらをじつと見ている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何だろう。

何で、こっち見ているのだろう。

・・・・敵か？

そうか。それなら納得いく。

何しろ、自分を恨み、命を狙う人間は星の数ほどいるのだ。

そいつらが放った刺客とも考えられる。

いや、そうだ。そうに違いない。

そう思い立てば、後は速かった。

すぐさま刀を抜刀し、中段に構える。

一切の隙のない構え。

当たり前だ。

自分が何度もやってきた構えだ。

目を瞑っていても出来る。

なあーん

さあ来い！

お前はどう動く？

小細工は無用だ。

さあ、存分に殺し合おうじゃないか！

なあーん

白い仔猫は、とことことカタナへと寄っていき、

ぺろり、

とカタナの手を舐めた。

「!?」

何なんだ!?

これはどのような攻撃だ!?

分からない。

解らない。

こんな攻撃初めてだ!!

なあーん

それから、ゴロゴロと喉を鳴らし、カタナへとすり寄っていく。

なあーん

なあーん

なあーん

・・・ちよつと、触れてみる。

柔らかい。

温かい。

なあーん

仔猫は嬉しそうに、鳴く。

「お前・・・一人なのか・・・?」

思わず、仔猫に尋ねてみる。

なあーん

「・・・そうなのか」

なあーん

「上等とは言えないが、食料と寝床がある。一緒に来るか？」

なあーん

仔猫は嬉しそうに鳴く。

「そうか。一緒に来るか・・・」

カタナは仔猫を自分の肩に乗せてやり、そのまま歩き出す。

なあーん

思わず、顔がほころぶ。

ある意味、最強の攻撃かもしれん。

——しかし

なんだかこの猫、普通とどこか違うような・・・

1

八月三十一日。

あと一日で夏ともおさらばし、九月になって秋である。

おそらく、調子に乗って宿題をまったくやらなかった者達は、へらへらして何もやらなかった昔の自分の呪いながら、必死の形相で片付けている頃であろう。

——まるで、締め切り前の小説家のように。

そんな日の昼下がり、魔術師の巣に珍客がやってきた。

「はあ？ この辺で格安の物件を探してくれ？」

「そうなのだ」

珍客——カタナはジンジャエールを飲みながら、こくりと頷いた。

「実はな、師匠に言われて俺もこっちで活動することになった。それで、俺もアパートを探したいのだが、この辺で手頃なものが見つからなくてな。探してくれると助かるのだが・・・。何しろ、部屋代は師匠に言われて自腹でな・・・」

「お前、意外とケチだな・・・」

狼はカルピスを——しかも、原液を——コップに注ぎ、飲み干す。

そして、コンマ一秒後、嘔き出した。

「汚いぞ・・・お前」

「うるさい。あー、死ぬかと思った。甘過ぎだ！」

「で、物件のことなのだが——」

「ああ。このボロアパートなんかどうだ？ 一階が空いてると思うけど。確か和室だ」

「家賃は？」

「敷金五万の家賃は月々二万五千円だ」

「借りよう！」

「・・・即断だな」

「当たり前だ。そんな安い物件初めてだ」

「んじゃ、あとで大家さんに話しておくわ」

「助かる」

「でも、大変だぞ？ ボロいからヘタすると畳全取っ替えの可能性もあるし」

「それなら心配ない。寢床で文句は言わない。雨露さえ防げれば平気だ」

「・・・お前、野良猫みたいだな・・・」

「むう。そうかもしれん」

「自分で認めるなよ・・・」

「まあいい。ところで狼、このアパートでは何か決まりとか罰則とかあるのか？」

「特にないと思うぞ。ペットもOKだし」

「そうか。それなら問題ない」

「まあ・・・書類とか書かなきゃならんから、あとでそういうのよこせ」

「こっちでの身分証明書はないぞ？」

「偽造しろよ。そんぐらい、異界の連中がなんとかしてくれるだろ？」

「それもそうだ。あとで話してみよう。ではさらばだ」

言って、カタナは席を立つ。

「ああ、そうそう——」

思い出したかのように、カタナは後ろを振り返る。

「さつさと、らーめんとやらを奢れ」

「いつかな」

「絶対だぞ！」

言って、そのままボタンとドアを閉める。

「・・・」

再び一人になった狼はごろんとソファーに横になる。

「普通、紹介してやったんだから、奢るのはアイツだろ・・・」



都内某所

「所長！」

「見つかったのか!？」

「いえ、まだです!!」

「何をしている!! 早く見つけなければ、この東京が・・・!!」

「・・・警察に・・・連絡しますか？」

「それで、生物災害^{バイオ・ハザード}を出して、都民を非難させるというのか!？ 馬鹿げてる!! もし、

そんなことをしてみる!! パニックに陥った都民が暴徒と化して、それこそ一大事だ!!」

「ですが・・・もはや、我々の手には負えません!!」

「くそう!! 何故こんな事になった・・・!?」

「すみません!! 昨日、うちの研究員の一人がピーター・セラーズのビデオを持ってき

て、みんなで見ている途中に……」

「あの、クルーズー警部か？」

「はっ、はい」

「それでは仕方がない。あれは面白いからな……」

所長は首を振り、苦悶に満ちた声で言った。

「……とにかく、だ。起きてしまったことはもう取り返しがつかない。これから、最善策を練らねばならない……」

「しかし、どうやってですか!? ただでさえ、この研究は、極秘裏に進められていた研究なんですよ!? 助っ人なんて頼めません!!」

「貴様、先ほどまで警察に頼もうとしていたではないか……!?」

「確かにそうですが……。ですが、やはり——」

「それに、助っ人を雇うとは私は一言も言っていないぞ」

「そういう話の展開になりそうだったので——」

「うむ。そういう話の展開にしようと思ったのだ」

「で、一体誰を——」

「究極の掃除人という男だ。奴はオタでロリな社会不適合者だが、やるときはやる男だ。心配ない」

「いや、社会不適合者というところでアウトなような——」

「問題はない。とにかく連絡だ」

「どういう風に？」

「新宿駅の掲示板にWXYと書き込むそうだ」

「パクリですか……」



「——と、いうわけなんだよ」

「分かんねえよ。いきなり、そんな風に言われても」

カタナと入れ替わりで来た亮に対し、げんなりとした口調で狼は言う。

本当に今日は変な日だ。

変な奴ばっかり来る。

「いやあ、マンガだと楽しんだけどな。説明せずに、回想シーンだけで済ませられるから」

「……ったく、何で俺の周りにはまともな奴が一人もいないんだよ……」

「仕方ねえじゃん。お前がまともじゃないんだから」

「……それを言われると非常にムカつくんだが。まあいい。——で、何があったんだ？」

「ふむ。実はな、とんでもねえことが起きた」

「何だよ？ 神隠し事件の次は、アブダクションか？」

「いや、生物災害だ」

「そりゃまた現実的な事件だな。で、いつゾンビが襲ってくるんだ？」

「信じてないだろ？」

「信じるか。んなこと。生物災害だつて？ バイオ・ハザード んなこと、そう簡単に起こるかよ」

「いや、正確には起こるかもしれない、つてところかな」

「起こるかもしれない？ 詳しく話せ」

「話そうとしてるのに、お前が揚げ足を取るんだろ・・・ったく、ちゃんと聞けよ」

亮は弄んでいたジッポの蓋をカシャン、と開け、くわえた煙草に火を付ける。

「実はな、ある製薬会社の研究所から逃げ出した猫を探して欲しいんだ」

「普通の猫じゃ、なさそうだな・・・」

「ああ。天然痘の潜伏猫だ」

「ブッ！」

狼は思わず飲んでいたカルピスを吹き出した。

「何で、んなアブねえもんが平和大国日本でいるんだよ？ テロでも起こす気か？ そ

れとも抑止力か？」

「どっちでもねえよ。強いて言うなれば、テロが起きたときの対策だな」

「対策？」

「ああ。ご存じの通り、二千一年のナインイレブン以降、テロに対する警戒が高まっている。

その中で上位に怖れられているのが、天然痘や炭疽菌などによる無差別テロだ。特に天然痘はWHOにより絶滅宣言が出てから、各国で予防接種を実施する所が減ってきている。

要するに天然痘に対する抗体が無い奴が多いってことだ。そんな時に、テロリストに天然痘をばらまかれてみる。一発でアウトだ」

口にくわえた煙草の灰が、ぼとりとテーブルにこぼれる。

「・・・なるほど。それに対するワクチンの実験を行ってたつてわけか。だがよ、ワクチンなら、一から作らなくても、もう設計図みたいなもんがあるんじゃないやねえか？ それに従って作れば——」

「・・・お前さ、特効薬とワクチン何か勘違いしてないか？」

「特効薬は日本語で、ワクチンは英語ってだけだろ？」

「・・・一応言っておくが、ワクチンは元々ドイツ語だ。それに、ワクチンは薬じゃねえ。弱い病原菌を体に入れて、抗体を生じさせる物だ。薬とは根本的に違う。まあ、だが、研究所で作っていたのは特効薬なんだが・・・」

「ワクチンの方がいいんじゃないやねえか？ それを事前に打っておけば——」

「いや。起きてからのほうが怖い。そういう薬を持つておかないと危険だつてことだ。

それに一応ワクチンなら日本にも備蓄はある。本当に、一応だけだな」

「・・・何となく、その特効薬つてのが普通じゃなさそうない気がしてきたな」

「ご名答。その製薬会社が開発している特効薬はキメラに対応出来るんだよ」

「キメラ？」

「ああ。その名の通り、人工的に合成された病原菌だ。これが一番やばくてな。何しろ、どんなに凶悪になるか分かったもんじゃない。どこかで兵器としてテロ屋が開発してるといふ噂もある。とにかく、そんなもんがバラまかれたらひとたまりもねえ。そこで、それに対抗出来るように各国でキメラに対抗する特効薬の開発を進めている。今回のもの、その一つでな。完成すれば、どんなに天然痘をいじくって強化しようとも、対抗できるという

凄まじい文字通り特効薬なんだよ」

「完成すれば、だろ？」

「まあな」

「だが、その猫が逃げたせいで実験はストップ。タチ悪いことにその天然痘が漏れて、感染者が出る恐れがある、ってことだな？」

「YES」

「洒落にならん。マジで」

「だから言ったら。だが、感染に関してはする可能性は低いらしい。何でも、その猫は遺伝子をいじくって、細菌が誰かに感染するようなことはないようにしているらしいぞ」

「そんな都合の良いこと、出来んのかよ？」

「さあな。だが、おかげで寿命は短いらしい。複製人間と一緒にだ。まあ、感染する可能性が低いって言っても、絶対感染しないとは限らない。とにかく、なるべく早く見つけて捕獲して欲しい」

「ちょっ——俺、まだ何も言っていないぞ・・・？」

「五百万」

「はい？」

「前金が、五百万だ。成功報酬一千万だ」

「いっせ——」

「受けるか？」

亮は、フィルターだけになった吸い殻を携帯灰皿にしまい、新しい煙草を一本口にぐわえ、ジッポで火を付ける。

「だが、俺が感染するって可能性も——」

「次回作にご期待ください」

「お前もかよ!？」

「いいじゃん。この間の天使との戦闘がクライマックスで、これは後日談ってことで」

「絶対ヤダ。後日談でショボイ死に方したくない」

「君もカムパネルラの気持ちを体験しよう！」

「・・・確かに、アレは哀愁漂みずぼろそうっていたな・・・。。。。。。。って、俺やっぱ死ぬの!？」

「気にすんなくて。重い水疱瘡みずぼうそうと考えれば大したこと無いって」

「十分大したことだ!! 俺ヤダぜ。全身ブツブツだらけで死ぬの」

「はははは。そりゃあいい！ 色男には似合いの死に様だ！」

「貴様っ!! まさか、それが目的だろ!？」

「ぐははははははは」

「あははははははは」

「なははははははは」

「ぶっ殺す!!」

「冗談だつて。冗談。それより、零那ちゃんどこ？」

無糖の缶コーヒーをすすり、亮が言う。

「ああ。なんか、大学時代の友人と会ってるらしいぞ」

亮の煙草をぐわえたままの飲み方を感じしながら、狼は言った。

「へえ。気のせいか、最近、俺、零那ちゃんに会ってない気がする」

「その方がいいんだよ。安全のためにも、お前のためにも」

「俺の？ そりやまた何で？」

「警察官の不祥事増やさないため」

「死んじやえ」



「久しぶりだね。何年ぶりだっけ？十年？」

「・・・智恵。わたしの記憶が正しければ、多分数ヶ月ってところだと思うけど・・・」
相変わらず、この自称名探偵。実際迷探偵な友人は脳天気^えに笑いながら、脳天気なことを言ってくる。

ここは横浜中華街にある中華料理店の一つだ。

さほど有名ではないが、大学生の頃、バイト代が入るとよく行った、要するに思い出の店だ。

・・・よく行ったって言っても、実際、数回しか行ってないけど。

ちなみに、四川料理のお店なので、名物は麻婆豆腐だ。

その常識を疑う辛さは、一度食すと中々抜け出すことの出来ない中毒を引き起こす。

「でもさ、何で昏睡状態から奇跡的に復活したってのに、大学辞めちゃったの？ やっぱり、色々思い出したくないこととか——」

「ううん。そんなんじゃないよ」

そう。

そういうのじゃ、ない。

ただ、もう戻れないってことを知っただけだ。

あの日、

あの土砂降りの雨の日。

狼に初めて出会った日。

その時、自分は悟ったのだ。

もう、戻れない、と。

表の世界には、戻れない。
かのじよ

それに、わたしにはもう——

「今、何してるの？」

「派遣業で、色々飛び回ってる感じかな」

「あの、魔術師^{マジシャンズ・ネスト}の巣^{ネスト}ってところで？」

「うん」

嘘は言っていない。

ある意味、当たってるし・・・

「・・・ところでさ、何でさっきから食べないの？」

「え？」

「だってほら、まだ運ばれてきた料理食べてないじゃん。珍しいね」

「え——」

わたしの目の前の皿に盛られた料理には、一切箸が触れられていなかった。
コップの水でさえ、減っていない。

「ああ、ちよつとダイエツトしててね——」

「嘘でしょ。知ってるから。わたし」

言って、彼女は様々なグラフや文章の書かれた何枚かのコピー用紙をわたしに見せた。

「やっぱり——」

まいったな。

知っていたのか。

やはり、名でも迷でも、探偵だな。

全て、お見通しってことか・・・

「今日さ、実は急に呼び出したのって、本当はこのことなの。零那が傷つくと思ったけど、確かめようと思って、さ——」

「ああ・・・そうだったんだ・・・」

いきなり、電話掛けてきて、いきなり来いだなんて、何事かと思ったけど、そういうことか・・・

心配——してくれていたんだな。

悪いこと、したな・・・

「未だに、信じられない。けれどさ、どんな方向で調べてもやっぱり——」

「そうだよ。多分、事実」

だから、わたしは隠さず、本当のことを言った。

「やっぱり、か——」

智恵はどこかの空って感じで、そう呟いた。

「でも、同情とか、お涙頂戴とか、そういうのはやめて欲しい」

「分かってるって。それに、わたしがそういう風に同情するタイプだと思ってるの？」

智恵はそう言って、笑った。

温かい、笑顔。

なんか・・・いいな。こういうの。

でも、駄目だよ・・・智恵。

そんな顔で笑われちゃ、

まだ、

そっちで生きていいって、

思っちゃうじゃん・・・

2

九月——

「・・・で、あれから一週間。何の手がかりも無し、と——」

「うるせえ。大体『何から何まで真っ白な猫』ってだけで探せるか！そもそも、研究所の連中はその猫に発信器とか付けてなかったのかよ!？」

狼はずるずるとカップ麺をすすりながら、不平を言う。

「そんなところに予算は回せなかったそうだな。どこも、世知辛い世の中でさ」

「研究していたところ、大手の製薬会社じゃなかったのかよ？」

「ああ。そうだが、なんつーか、島流しの部署だったらしくてな、所長含めて、スタッフは二十人ぐらいだそうだな」

バリバリとポテトチップスを頬張り、亮が淡々と言った。

「こつ、国家プロジェクトじゃなかったのかよ……？」

「んなこと、いつ言っただ？ 国家つてはシビアだな。そんな、完成するか分からない特効薬なんかには金は回さねえって」

「……依頼料はどっから出たんだよ？ 前金と成功報酬合わせて千五百万だぞ？」

「んー。なんか、所長の貯金と、研究所の職員の給料前借りで出したらしい」

「なつ、なんか、良心が痛むんですが……」

「ついでにいうと、その研究所に回す資金も来年度から削減するらしい。よーするに、もうそんな都合のいい特効薬なんざ作れないって、上は判断したんだな」

「……そこに、今回の脱走騒動……。職員の連中、流石に滅入ってるだろうな……」

「うんにゃ。そういう意味では平気っぽいぞ。なんか、とつとと辞めてアメリカとかヨーロッパのチームに入ろうとしてるらしい。何だかんだ言っ、あそこのスタッフは優秀だそうだからな。転職先には困らないらしい」

「そうだったんだ……」

「ああ。んで、立つ鳥跡を濁さずってのかな。最後にきっちり猫見つけて、辞めたいわけだ。そういうわけでよろしく」

「よろしく、じゃねえよ!! 正直、保健所とかに連絡したほうが絶対いいって!!」

「いや、俺もそう思うんだが、なんか嫌らしい。連れてかれて殺されるのは可哀想だとか、何だとか——」

「可哀想……って、実験動物にしてるそいつらはどうなんだよ……」

「そうだよな。でもやっぱ、天才の考えることはよく分からないってことで」

「済ますなよ。つてかさ、そいつらのんびりしすぎなんじゃねえのか？ 仮にも、生物災害バイオ・ハザードになる危険性があるんだ。もっと、焦ってもいいんじゃないやねえの？」

「そうだな……。俺がこの間行っったときなんて、職員の一人が携帯ゲームで遊んでいたし」

「携帯ゲーム？」

「たまごっち。それも初期型」

「……なんか、猫が簡単に脱走できたの、分かった気がする……」

狼はマリアナ海溝よりも深いため息を吐いて、空になったカップ麺の容器を屑籠に放り投げた。

「で、今日も零那ちゃんはいない？」

「話題変えるなよ。まあ、今日は買い物だから、直ぐ帰ってくんじゃねえの？」

「待ってよう」

「帰れっ！ 危険人物がいると迷惑だ！」

「危険人物、ねえ……。そう言うお前、零那ちゃんのこと、どう思ってるんだよ？」
亮はご丁寧ポテトチップスのカスまで綺麗に平らげ、意地悪そうな笑みを浮かべ、尋ねる。

「どう、つて、どういう答えを聞きたいんだよ……。？」

「いやいや。別に答えなんか聞きたくねーでやんすけど、まあ、強いて言うなればあ？
こんなアパートで同姓してるんだあ。なーんかあ、やましーことや、いやらしーことして
いても不思議じゃあないだろう？」

「……。喋り方キモイぞ。つーか、やましいも何も、俺はこのアパートの隣の部屋で寝
てるからそんなこと無理だ」

「だが、ここで疲れ果てて寝るってこともあるだろう？」

「ああ。そういう時は――」

狼は箸で事務机を指さす。

「あそこの下で寝る。部屋の近くだからつて、ソファーも使わせてくれない」

「徹底してるな……。というより、お前が信用されてないだけじゃ……。？」

「それに、零那は俺の趣味じゃないんだ。胸も足りないし、身長も小さすぎる。まあ、
髪が長いのはOKだけだな」

「おやおや、人の身体的特徴で差別かい。ちっせえ人間だなあ。だが、零那ちゃんがブ
レザー＆プリーツ・ミニスカ姿だったりしたら、どうするんだよ？」

「……。？」

「マジで悩むな！なんか、こっちまで悲しくなる」

「……。まあ、冗談はさておき」

「いや、今のはぜつてえマジだったような――」

「とにかく、俺と零那はそんな関係じゃないんだよ。いや、マジで」

「ホントかよ。だったら、俺が零那ちゃんもらってもいいのか？ それでいやらしいこ
とを――」

「やったら、死んでも後悔させるほどの苦痛を与えてやる」

「冗談だつて。だけど、いいよな。このアパート。風呂共同だし」

「……。一応予測できるが、聞いておこう。何で風呂共同だといひんだい？」

「そりゃあ、お前。「あつ、ごめっえーん！ 入つてたのおく？ イヤーン」みたいな
ラブコメちつくな展開が可能だからだアアアアア！」

「すぐ殺そう。今殺そう」

狼はベキリ、と箸を折り、それを亮に向ける。

「……。ちよつと、戯れ言が過ぎました。ごめんなさい」

「つたく。テメエ様はよお……。？」

途端。

ドアが、がちゃりと開く。

「お、帰ってきたみたいだな」

「何っ!?」

言って、すぐさま亮はソファーから飛び立ち、玄関へと向かう。

「零那ちゃんお帰りー」

目と目が合う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「誰だ？」

「誰だよ？」

二人は同時に尋ねた。

「おー。カタナか。何だ？何か用か？」

亮と目があって固まっている青年——カタナに向かって、狼は声を掛けた。

「誰なんだよ、コイツ？」

「カタナって名前の殺人鬼だよ。異界の」

「ああ。そうなの」

亮は相手が殺人鬼だというのにも関わらず、あつさりとした口調で言った。

「で、何か用か？」

「ああ。ちよつと、聞きたいことがあってな。ペットフードはどこで売っているのだ？」

「ん？ ああ。コンビニとかでもあるし、デパートでも売ってる。要するに、食料品が売つてるところなら大抵あるぞ。しかしどうしたんだ？ なにか飼うのか？」

「ああ。少しな。大したものではない」

口調は平坦で、いつもの朴訥とした表情だったが、心なしか満ち足りているような感じがする。

「ふーん。何だ？ 鳥か？」

「いや——」

言って、カタナは自分の肩にちよこん、と乗せた。

なあーん

「猫・・・・・・・・」

真っ白な、仔猫。

「おいおい、まさか——」

亮は引きつった顔でその仔猫を凝視する。

「どうしたんだ、それ？ ペットショップで買ったのか？」

「いや、拾った」

「いつ？ いつ拾った？」

「どうしたんだ？ 狼。そんなに慌てて。拾ったのは三日前だな。それが——」

「なっ、亮！ どうなんだ！」

「しゃ、写真見せられたときと同じ姿だ・・・」

「じゃあ、やっぱ——」

「ビンゴ・・・かしんねえ・・・」

「カタナっ!!」

「なっ、なんだ？どうしたんだ？」

「それ、天然痘の潜伏猫^{キヤリアー}……」

「まさか！ そんなマンガや小説のような世界じゃあるまいし——」

「なあ、お前！」

亮は震える声でカタナに問う。

「何か身体に異常はないか!? 発疹とか——」

「ああ。あるぞ」

言って、カタナは自分の右の二の腕を見せる。

確かに、うつすらと赤い小さな発疹が、数個ある。

「結構痒くてな。困っていたんだ。よく分かったな」

「完全に……ビンゴだ……」

「しかも、最悪のケースだな……」

「さっきからどうしたんだ？ 二人とも——」

「カタナ！ 早くそいつを捨てろ！」

「いや、捨てるな！ 捕獲しろ！ 捨てて逃げても困るし、殺して天然痘が蔓延したら、洒落にならん！」

「どうしたというのだ？」

「それ！ 本物の潜伏猫^{キヤリアー}なんだよ！ お前の腕の発疹がその証拠だ！」

「何だと!?」

カタナは自分の腕を凝視し、驚愕する。

「とにかく、感染してまだ時間が経ってない！ 助かる！ だから、早くその猫を——」

斬。

いつの間にか抜きはなった刀が、虚空を斬る。

「断る」

「っ!?」

「最初出会った時から気付いていた……」

「何を——」

「この仔猫の瞳……。これは俺と同じ、過酷な場所を生き抜いた者特有の目だ……」

なあーん

「いや……。そうは見えないような——」

「俺はおそらく無意識に、こいつと自分を重ねていたのだろう……。だからこそ——」

切っ先を、狼の眼前へと向ける。

「俺はこいつを守る。たとえ、自分の命が尽きようとも」

「いや、その前にこの新宿が——」

「こいつと一緒になら、世界を敵に回しても俺は本望だ……」

「そんな大きな話でもないような……」

「そうかい——」

亮のツツコミを軽く無視し、狼が嗤う。

「なら、貴様を倒さなければならねえ……ってことか……。おもしれえ。世界を救う主人公ってのは一度やってみたかったんだよ。感謝するぜ……」

Cz75、と呼ばれるチェコの名銃――

「ふん。石弓を振り回していた原始人の貴様が、文明の利器とは……なかなか面白い……」

「言ってる」

「何を言う。俺達の戦いに――」

素早く、自分の握る刀を振るう。

「言葉はいらないっ!!」

「ちっ――」

狼はその剣撃を間一髪で避け、カタナを押しわけ、階段を飛び降りる。

「降りて来いよ。そこじゃ、殺り難いだろ？」

「ふん。確かに、その中庭ならば広いが、貴様には不利な地形だ」

「はっ！ 何言ってるやがる！ 悪は絶対に負けるんだよ！」

「ならば、貴様が悪だ！」

言い放ち、カタナは一気に階段を飛び越し、狼の眼前へと立つ。

「いつかみたいに、不意は打たせないぜ！」

「言ってる。接近戦ではこちらの方が数十段上だ」

「……言葉はいらないって言ってたじゃねえか……」

亮のツツコミなど誰も聞いていない。

じり、

まさに一触即発。

互いに互いを牽制し、間合いを詰めようとする。

まだ、残暑が残っているようだ。

太陽が、憎たらしいほど熱い。

じり、

狼は銃を片手で構え、

カタナは中段に構えている。

どちらも、瞬間的に互いを仕留められる。

だから、これは、

最初に動いた方が負けだ。

手が、汗ばむ。

口が、乾く。

じりじり、

じりじり、

太陽が、両者を焦がす。

なあーん

斬。
弾。

両者が、ほぼ同時に動く。

「やるじゃねえか・・・」

「貴様もな」

狼は右手に握る銃で刀を受け、カタナはそれを叩き斬ろうと体重を掛ける。

じり、

じり、

一触即発。

じり、

じり、

「いつまでやってるんだよ・・・あいつら・・・」

亮はほぼあきれ顔で、階段の手すりにもたれ掛かりながら煙草を吹かす。

「カタナ・・・」

「何だ・・・？」

「どうして、そこまで世界を憎む？」

「ふつ、知れたこと。ここまで狂った世界を憎まぬ者の方がまともではない！」

「・・・なにやら、盛り上がっているようだ。」

「なんか、いつの間にか、かなりスケールのかい話になっているな・・・」

「・・・ってゆーか、世界の存亡までいくか？普通。」

「しかし、不思議だよな・・・」

取りあえず、連中から目をそらし、近くにいる猫に目を向ける。

流石にあの馬鹿共はやりすぎだが、天然痘は本当に恐ろしい存在だ。

それに対して、あの研究所職員の状態・・・

『必ず見つけてきてくださいね。お腹が減って死んでしまつては可哀想ですから』

『これ、あの仔猫の好物なんです。見つけたらあげてやってください』

『はっはっは！ とにかくよろしくお願いしますよ』

・・・などなど。

――血も涙もない集団なのか、それとも・・・

「潜伏猫キャリアー・・・じゃ、ないのか・・・？」

だが、それならば、その猫に千五百万もかける意味が分からない。

・・・謎だ。

「なあ、お前知ってるか・・・？」

なあーん

白い仔猫はただ、鳴くだけ。

「・・・そうだな。分かるわけないよな」

だって、猫だし。

「ああ。ここにいたんですか」
「ん？ アンタは——」



『六月生まれのあなた！ 今日のラッキーアイテムは白い仔猫です！』
アニメ絵の女の子が、憎たらしいほどの笑顔でそう告げる。

「ふーん」

何となく入ってみたゲーセンの古ぼけた占いマシンの前で、零那は関心なさそうに呟いた。

二百円、無駄にしたな・・・

はあ、とため息を吐く。

そもそも、占いなんざ、興味はない。

興味があるのはむしろ、ここに設置された別の筐体だ。

アヴァロンの鍵、と呼ばれる大型の筐体で、本物のカードを読み取ってゲームを進める。ゲームの内容は、カードゲームというより、双六などのボードゲームに近い。

それが、零那がはまった原因の一つでもある。

「さてさて、いっちゃ始めるとしますか」

言って、零那はデッキケース——ご丁寧に自作——とICカードを取り出し、ぱたぱたと筐体へと向かっていった。



「アンタは——」

「探しましたよ、五月雨 亮さん。猫、見つけてくれましたか？」

いくら、ここがアパートだらけの下町で、ある意味都会とは言えないと言っても、よれよれの白衣に、潰してスリッパのようにした革靴という格好でうろつく者はまともじゃない。

「所長が聞いてこいって五月蠅くてね。署の方にも行っただんですが、留守だったんで。

あなたの後輩と名乗る人に聞いて、こちらに来たんですよ」

・・・そのカッコで行ったんかい。

男はそんな亮の半眼の表情を軽く受け流し、さわやかな笑みでそういった。

「ああ、見つけてくれたんですね。ありがとうございます」

男は次に、亮の近くの仔猫を拾い上げる。

「やっぱり、それが潜伏猫キャリアー・・・なのか？」

「えっ？ ああ、はいはい。そうです。潜伏猫キャリアーです」

そう言いながらも、男はさほど慎重に扱う様子もなく、仔猫の喉を鳴らす。

「・・・実はですね。これ、潜伏猫キャリアーじゃあないんです」

「やっぱり・・・。だが、どうしてそんな嘘を？」

「いや、最初はそうだ思っていたんです。所長なんか、顔青ざめてしまっただけですが、

三日後に研究所内で見つかったんですよ。死んでいましたけど」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もともと、劣性遺伝だったもので、長くは生きられなかったのでしょう。研究所のゲージの端で硬くなっていました」

「・・・・・・・・じゃあ、何でそんな嘘を？」

「製薬会社に対する一種の嫌がらせです。生物災害バイオ・ハザードみたいな不祥事を自分の傘下の研究所が起こしたなんてマスコミに知れたら一大事ですから。脅迫じみた一種の交渉材料ですよ。我々全員の再就職のね。連中、機密情報を漏らさぬよう再就職を妨害してましたから」

「ああそうか——」

それならば、あの大金の依頼料も納得がいく。

自分らに対する、口止め料やらもろもろも含まれていた、ということか。

「おかげで、我々が隠蔽し、不祥事を未梢することを条件に職員全員の再就職が決まりました。連中は、自分達が騙されたということも、おそらく気付いていないでしょう」

男はからからと笑いながら、言った。

「で、その猫は？」

「ああ。これですか？」

男は猫を地面に戻す。

「研究所で飼われていた、いわゆるペットですよ。職員全員が交替でエサをやったりして、結構なつかれていたんですが、あの潜伏猫脱走キャリアーの時期と同じく逃げ出しましてね。探していたんですよ」

「ああ、そう——」

亮はちらりと、眼下に目をやる。

未だに二人は、死闘らしきじゃれ合いをを演じている。

「俺はまだ世界を諦めちゃいないイイイイイ!!」

「ふはははは!! 愚か者めが!!」

・・・・結構、楽しそうだ。

しばらくは放っておこう。

「では、私はそろそろこいつを連れて帰りますね」

男は猫を抱き上げ、白衣のポケットからしわくちゃの小切手を亮に手渡した。

「成功報酬です」

亮はしばし、それを眺めていたが、徐に受け取り、ビリビリに破った。

それから、自分のポケットに入っていた前金の小切手も破く。

「なあ、報酬は別の物にしていいいか？」

「いいですよ」

「じゃあ、その猫で——」

「はい。大切に飼ってくださいね」

男は笑いながら、真つ白な仔猫を亮に渡した。

「へー。そんなことがあったんだー」

零那は、体を洗いながら言った。

「まったく、ホント迷惑な話だぜ」

「でも、よかったじゃない。本当に天然痘が蔓延したらそれこそ一大事よ」

「・・・まあ、そうだけどな」

「でさ、カタナさんの発疹は何だったの？」

「ああ、アレか？ 蚤に刺されたんだとよ。依頼人から薬もらって、もう痒くなくなっ
たってさ」

「へー」

ザブン、

湯船に浸かる。

「とにかく大変な日だったぜ。今日は。まったく、何なんだ、あのオチは。ホントくだら
ねえよ。小説になってもつまんなくて、読者が読むのやめるだろうよ」

「でも、それでいいんじゃない？つまんなくてさ。つまんないってことは、要するに平
和だったってのとアバウトイコールなんだから」

「そうだな。そうかもな――」

眩き、狼は夜空を見上げる。

空には満月が輝いていた。

「でもさ、狼・・・」

「ん？」

「アンタ、風呂入ってる時も片眼鏡外さないの？」

「んなわけねえだろ？ 外してるよ」

「ふーん」

「何だったら見に来るか？ そこの戸板薄いから、簡単にぶっ壊せるぞ？」

「死ね」

戸板を飛び越え、桶が飛んで来る。

「へっ！ 当たるかよ」

ガツンッ

今度は長椅子が降ってくる。

直撃。

一気に狼のH ホームページ PがOになった。

「お・・・に・・・」

ぶくぶくと、そのまま沈む。

「狼っ！」

「何だよ・・・？」

軽く髪を掻き上げ、いきなり血相変えて乱入してきた珍入者を見やる。

「丸餅まるもちがないい！」

「丸餅？ 正月にはまだ早いぞ」

「違う。猫の名前だ」

「猫の名前？ お前、ネーミングセンスねえな」

「そんなこと、どうでもいい！ どこにもいないのだ！ もう、食事の時間だというのに……」

「どうでもいいけど、その猫の名前、千五百万円に変えないか？」

「何処に行ったのだろう……」

「軽く無視された……」

なあーん

隣の女湯の方で、仔猫の鳴き声がする。

「そこか！ そこにいるのか!？」

「うわっ！ 馬鹿！ お前、それはマジボケか!？」

ガンガンと戸板を叩くカタナを羽交い締めにし、狼は叫ぶ。

ミシミシミシ……ベキッ!!

オンボロの戸板は、カタナの攻撃にあっけなく破壊される。

「……やあ」

その後。

季節外れの花火が二つ、大都会の夜空に舞った。

「六、愚者共の挽歌／了」